

たけうち のりなか  
竹内 法心

J P U ・ 副委員長

## 歴史の検証から得る勇気とらこと

昨年から靖国問題でクローズアップされたのか、書店に行くと太平洋戦争に関連した本が結構出版されており、何冊か買って読んで見ることにした。

読むきっかけは、現代社会でおきている様々な不祥事が発生する体質、そしてその時におけるリーダーの対応を目の当たりにして、太平洋戦争における悲惨な戦闘となった原因とその後の反省が現代社会に活かされているのかという点であった。

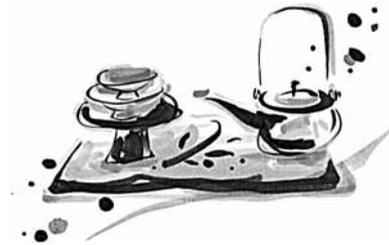
何冊かの本の中から、NHK取材班が編集した「太平洋戦争 日本の敗因4 責任なき戦場インパール 角川文庫版」に関する感想を記すことにする。

インパール作戦とは何か、戦後生まれの私たちにはあまり聞き覚えがないが、終戦前年の昭和19年3月から6月までのおよそ4か月間で、日本兵約3万人が亡くなった「インパール(インド東部・ミャンマー国境山岳地帯連合軍の拠点)攻略作戦」を言う。この作戦がなぜ実行され、その時リーダーはどのような行動を取り、結果に対してどのような責任を果たしたのであろうか。

当時、英国インド・ビルマ地区第14軍司令官であったビル・スリム中將が戦後1959年12月14日に出した手紙の内容がこの本に紹介されている。少し長いが引用させて頂く。その内容は、日

本軍がインパール作戦で失敗した最大の原因について問いかけたことに対して、「たしかに柔軟性のなさ、というのは日本軍の犯した過ちの大きな原因ではある。しかし、指揮官たちが『書面通りに、命令に従った』というよりは、『道徳にそった勇気の欠如』に最も大きな原因があると思う。それがために、部下が上官に対して、彼が下した命令が状況にそぐわないものであるということ、あるいは、不可能なことであるということ、言えなくしたのである。結果として(戦いの)状況に応じて変えられることがなかったのである。」

では、当時の陸軍にこのインパール作戦が無謀であることを、意見として出した人はいなかったのであろうか。この本から事の経過についてふれると、インパール作戦が作戦準備指令が出される前に、補給困難(実はこのことにより作戦は失敗し、三万人以上の累々たる屍をさらすことになる)を理由に作戦に反対していた第15軍参謀長が更迭される。同じく上級軍である南方軍総参謀副長も解任。さらに、第15軍に属する各師団長や、ビルマ方面軍参謀長などの反対を第15軍司令官が押し切って進め、作戦が決定されることになる。しかも、作戦最高責任者である上級組織のビルマ方面軍、そしてその上の組織である南方軍司令官は作戦を綿密に検討することなく、情を絡めてそのまま作戦を決定することになる。その後、作戦



実行過程で、第15軍を形成する3師団の師団長が理由は異なるが全員解任されるという異常な事態で作戦が進められることになる。そして、日本軍10万人以上の内、戦死者3万人、傷病兵4万人が犠牲となり、その死亡原因の大半は当初から無謀な作戦とされた補給不能による餓死によるものであった。そして、今なお数知れない遺骨がインドとミャンマーの国境にある「白骨街道」に眠っているのである。

そして最後の項に、「インパール作戦は、戦略が政略に負けた作戦。こうした権力を持ったひと握りの者の声が、やがて組織、ひいては国家全体の意志としてまかり通ってしまうということは、あってはならないことのはずである。しかし、現在の日本では、似たようなことが日常茶飯事に、様々な組織で起きている。また行われている。勝利したイギリスが、この作戦を歴史上の重要な教訓として様々な形で細かく分析している。日本が検証することが多くの犠牲者に対する『責任』ではないか」と指摘している。

昭和の陸軍指導者は、生産力等の客観的な情勢を十分検討することなく作戦を決定し、悲惨な死に追いやっても誰一人その責任を取ることがなかった。しかも、その責任を曖昧にしたことが、失敗に対する反省と検証を置き去りにし、同じ過ちを何度も繰り返すことになり、太平洋戦争で最

前線で戦った何百万人という一般の兵士を悲惨な死に追いやることになった。この放送は1993年に放映されたが、未だ現代日本社会にも病巣として存在しているといえるのではないかと思う。

先日ある方とお会いしたとき、「当社では、失敗の事例を社員教育のメインにしている」とお話しされていた。どんな企業であれ、失敗は必ずある、失敗の事例を学ぶことと同時に、組織の中に事実即してノーといえる体質を醸成しているかが重要なファクターではないか。失敗は繰り返す、とすればから少なくとも同じ失敗や過ちを起こさないために教訓として細かく様々な角度から検証し分析することがなぜ出来ないのであろうか。

そして、上司と部下とにおいて人事権を盾にとって封じ込めるのではなく、自由で闊達な風土を醸成しつつ、その上で良い意味での緊張感ある関係が必要ではないのか。一人の権力者の意見が反対意見を封じ込める社会には明るい未来は存在しない。

しかも、このことは単に企業レベルだけのことでなく、日本社会、日本の政治にも当てはまるのではないだろうか。「道徳にそった勇氣の欠如」と「歴史上の重要な教訓として様々な形で細かく分析」ということを、今の時代に生きている私たちは忘れることなく自らの行動を検証していきたい。